

第二の軽井沢を夢想した “観光デザイナー” 松本隆治と宮崎寛愛

観光リスクマネジメントの観点から

小川 功

Isao Ogawa

跡見学園女子大学 / 教授

滋賀大学 / 名誉教授

老川慶喜氏らによる『堤康次郎』¹⁾には大正期の軽井沢の別荘開発について多くの頁が割かれ、婦恋村等での観光施設にも言及されている。また軽井沢別荘史研究の先駆者の一人である安島博幸氏は「軽井沢の場合、北、中軽井沢地区へは戦前から拡大し、さらに南軽井沢、追分、草津方面へと広がっている」²⁾と、北軽井沢地区への拡大が他地区に先行した点を的確に指摘されたが、残念ながら北軽井沢の分析は十分な言及に至っていない。また北軽井沢周辺の観光・別荘開発について、佐藤淳氏らの一連の研究³⁾は大いに参考とさせていただいた。また『長野原町誌 下巻』⁴⁾も地元の自治体史として多くの示唆を与えるが、残念ながら現存企業・団体に関する記述が多く、明治末期・大正期の消滅企業等にはあまり言及していない。また北軽井沢に関与したと目される信託・金融機関等についての先行研究⁵⁾も管見の限りではほと

1) 由井常彦・前田和利・老川慶喜『堤康次郎』リプロボート、平成8年、p92、p208 ほか。

2) 安島博幸・十代田朗『日本別荘史ノート』住まいの図書館出版局、平成3年、p281

3) 佐藤淳編『きたかる』2号
北軽井沢コンソーシアム協議会事務局

4) 『長野原町誌 下巻』昭和51年を単に町誌と略したように、以下の略号を使用した。

[主要引用文献一覧]

①[基本資料・文献]

検査…1505-136734「明治四十二年十二月北海道拓殖銀行検査官提出書類綴」北海道拓殖銀行旧蔵資料、
吾妻…吾妻土地建物『創立趣意書』大正10年、
避暑…『吾妻牧場内の避暑地開設』
明治43年8月吾妻牧場株式会社
(群馬県立文書館所蔵資料目録近現代 H0-130-2
www.archives.pref.gunma.jp/.../list_02.do
平成26年1月9日検索)、
紫文…水野豊『紫文集』日比谷書房、大正9年、
沿線…金子常光画『草津軽便鉄道沿線案内』
草津軽便鉄道、大正12年、
旗手…旗手勲『日本における大農場の生成と展開—華族・政商の土地所有』御茶の水書房、昭和38年、

んど見当たらない。本稿では老川、安島両氏をはじめとする優れた先行研究の豊富な蓄積がある軽井沢地区に比べ、資料が乏しいこともあって未解明部分がなお多く残る北軽井沢の初期のリゾート開発に関して、旧北海道拓殖銀行文書⁶⁾、並びに筆者が入手した吾妻土地建物の創立趣意書(後述)等を活用して、佐藤淳氏らの研究や町誌等で欠落した部分でもある北軽井沢の「観光デザイナー」⁷⁾としての松本隆治と宮崎寛愛らの役割と功罪に焦点を当てようと試みた。

北軽井沢の外延部を形成する南木山一帯は所有者の南木山「組合などの力ではとても経営の見込みは立たぬ」(村誌, p1169)と見なされ、大正期には「自称周旋屋なるものが、東京始め武州、上州、信州の各方面に簇出」(村誌, p1169)、「東京の山師連で南木山を知らない者は一人もあるまい」(村誌, p1169)とされたほど、山師が跳梁跋扈する恰好の投機対象であったという。したがって本稿でも「山師連」と目される虚業家⁸⁾が少なからず

登場し、たとえば宮崎寛愛は「山師気のある人」⁹⁾との評も見られた。また彼らに資金を提供した銀行、金融業者等も小栗銀行を筆頭に多分にリスク・テッキングな傾向がうかがえる。したがって本稿は筆者長年の探求課題である「虚業家」研究¹⁰⁾の一環として、リゾート開発に不可避なリスクの対処策、観光リスクマネジメントの観点から北軽井沢周辺の観光・別荘開発業者の軌跡を辿る試論でもある。なお北軽井沢の開発と不可分の関係にある草津軽便鉄道の構想に関しては別稿¹¹⁾を参照されたい。

Ⅱ 北軽井沢の“観光デザイナー” 松本隆治

1. 松本隆治

松本隆治(日本橋区村松町48)は松本隆治法律事務所を主宰する弁護士、明治41年2月には水野豊を所属弁護士に加えた。(M41.2.24 東朝①)

町誌…『長野原町誌』下巻、長野原町、昭和51年、
村誌…『嬬恋村誌』下巻、嬬恋村、昭和52年、
安島…安島博幸・十代田朗『日本別荘史ノート』
住まいの図書館出版局、平成3年、
きたかる…佐藤淳編『きたかる』2号、
北軽井沢コンソーシアム協議会

②[会社録]

要…『銀行会社要録』東京興信所、
帝…『帝国銀行会社要録』帝国興信所、
諸…『日本全国諸会社役員録』商業興信所、
商…『商工信用録』東京興信所、

③[新聞・雑誌]

東朝…東京朝日新聞、読売…読売新聞、
B……銀行通信録、内報…帝国興信所内報。

5) 信託・金融機関等は麻島昭一編

『本邦信託文献総目録(戦前の部)』信託協会、昭和49年、
全国地方銀行協会『日本金融機関史文献目録』昭和59年

6) 北海道開拓記念館所蔵

「第二 吾妻牧場調査概要報文」

『明治四十二年十二月北海道拓殖銀行検査官提出書類綴付報告書』(北海道開拓記念館1505-136734)

などの閲覧でお世話になった北海道開拓記念館学芸員の山田伸一氏に謝意を呈したい。

7)「観光デザイナー」は拙稿「“観光デザイナー”論—観光資本家における構想と妄想の峻別—」

『跡見学園女子大学マネジメント学部紀要』第14号、平成24年9月参照。

8)「虚業家」は拙稿「『企業家』と『虚業家』の境界—岩下清周のリスク選好度を例として—」

『彦根論叢』第342号、平成15年6月、p133-142参照。

9)「錦町百年史」第3章

(www.phoenix-c.or.jp/~ryousi/sub113.htm
平成26年1月9日検索)

10)「虚業家」研究は拙著「『虚業家』による

泡沫会社乱造・自己破綻と株主リスク—大正期“会社魔”松島肇の事例を中心に—」滋賀大学経済学部研究叢書第42号、平成18年2月、
同『虚構ビジネス・モデル—観光・鉱業・金融の大正バブル史—』、日本経済評論社、平成21年などを参照。

11) 拙稿「北軽井沢の観光デザイナー—草津軽便鉄道の構想を中心に—」『跡見学園女子大学観光マネジメント学科紀要』第4号、平成26年3月参照。

弁護士としては明治42年5月芸能関係者同士の紛議の裁判で「松本隆治、水野豊の両氏」(M42.5.6東朝④)が一方の訴訟代理人となったり、明治42年5月日糖事件に連座した政友会代議士の奥野市次郎、栗原亮一(代議士辞職済)、森本駿らの弁護に当った。(M42.5.11 東朝②) 明治40年頃吾妻牧場を小栗銀行からの借入金で払下げを受けた松本は衆議院議員でもあって、日糖事件の裁判以前からこれら政友会有力代議士となんらかの接点があったと仮定すると、幅広い人脈が牧場払下げ運動にも有利に働いた可能性が高い。松本(日本橋区村松町48/東京市外下渋谷羽根沢382(T11.2.1 東朝⑧)/下渋谷氷川町382(紳T11, 中p149))は弁護士・松本隆治法律事務所主(M41.2.24 東朝①)の傍ら、吾妻牧場取締役、中央商業銀行監査役(要M40役, p385, 要M44, 役, p360)、模範養魚、草津軽便鉄道各取締役、草津軽便鉄道③600株主(帝T5, p180)、中央商業銀行監査役等を兼ね、さらに、11万円出資の日本鑿泉代表社員(帝T5職, p191)として地蔵川別荘地を開発した。

大正10年では引き続き「吾妻東避暑地」(吾妻, p6)を経営していたが、大正11年「病氣之處一月三十一日午前四時死去」(T11.2.1 東朝⑧)した。死亡広告の喪主は妻の松本光子、友人総代には木下謙次郎、美濃部俊吉、佐藤五百巖、法学博士青木徹二、水野豊が名を連ね、死亡時の在任役職はラサ島燐礦常務、日本鑿泉合資会社社長、草津軽便鉄道取締役、大阪製煉社長であった。(T11.2.1 東朝⑧)

松本隆治は①皇族財産たる吾妻牧場の払下げを実現させ、②本業の損失を補填する副業を種々立案して巨大牧場を民営化し、③本命視した競馬

開催を目指して試行錯誤を繰り返した末、④避暑地建設のグランドデザインを策定し、⑤牧場の交通アクセス改善のための草津軽便鉄道を草津温泉の旅館主と連携して創業し、⑥志に反して牧場収束後も粘り強く別法人・関係企業等で避暑地建設を続行、⑦病気で倒れたが優れた後継者・水野豊(後述)を養成するなど、払下地の短期転売利益を目論んで売り逃げた多くの投機筋とは異なり、長期的に持続可能な観光デザインを着想し、創意工夫を加えて改良を積み重ね、関係企業のマネジメントにも能力を発揮し、結果的に北軽井沢の今日の地位を確立させるのに大きく貢献した観光デザイナーと評価できる。

2. 吾妻牧場株式会社

明治13年「北白川宮家に於かれて軍馬養成の目的を以て牧場の御経営遊ばされ」(沿線)た。当初は綿羊の飼育繁殖の牧場を計画したが、陸軍中将でもあった北白川宮能久親王の意思で、明治16年軍馬の改良増殖に目的を変更し、旗手勲氏によれば「明治十六年には皇族の北白川宮も群馬県に二一七町の官有地払い下げをうけ、十九年から浅間牧場を経営」(旗手, p49)「高崎鉄道が群馬地方に延長しはじめた明治十六年には、北白川宮が皇族の身でありながら群馬県吾妻郡に二一七町の浅間牧場を開設し、十九年から本格的な牛馬飼育を開始」(旗手, p68)したとする。明治「三十年遂に同地を宮家に払下げ、今は全く宮家の御所有に帰した」(35.10.6 東朝②)が、牧場経営は軌道に乗らず、明治39年に民間へ譲渡されることとなった。¹²⁾

明治40年5月発行の『銀行会社要録』所収の「戦後企起調」には「東京 吾妻牧場 計画資本

12) 農商務省農務局『本邦牧場一斑』大正6年, p133

金額1,000,000新設登記済…」(要M40, p60) が記載されている。この「戦後企起調」には「北海道北海道馬匹奨励500,000」(要M40, p57)「東京日本馬匹改良 新設登記済300,000」(要M40, p58)「東京 総武牧場 新設登記済100,000」(要M40, p59) など競馬関係の起業と目される計画が多数含まれている。

「吾妻牧場会社 駒場農科大学出身諸氏発企と為り、北白川宮家御所有地吾妻牧場の払下許可を得たるに付、馬匹の改良を主とし養牛其他預託場<馬の誤記>の育成、耕作、植林等を副業とする吾妻牧場株式会社を創立せる由。資本金総額は一百万円にして創立事務所は日本橋区村松町四十八番地なり」(40.1.21読売②)と報じられた。村松町四十八番地は松本隆治法律事務所の所在地であり、「駒場農科大学出身諸氏発企」と見せかけつつも実際には「松本隆^{マツモト}“二”外三名ニ払下トナリ」(検査)とされたように創立事務所を主管した松本が払下計画の首謀者と目される。

「吾妻牧場株式会社株式募集広告」は以下の通りである。「当会社は北白川宮家に於て多大の資本を投じ二十有余年間御経営在らせられたる群馬県吾妻牧場の払下を受け、之れを基礎として馬牛の改良蕃殖を図るにあり。一、該牧場は広袤約八百万坪(内畑地約四十万坪)ありて土地平坦地味沃壤、四面遠近山を望みて内に森林河流あり。風土氣候宜しきに適ひ、真に天与の牧場にして、耕地屋舎(四十五棟)亦備り…全国中他に比類なし…政府は新たに馬政局を設け、斯業発達の保護奨励に努めつつありて、競馬等の流行ありと雖、根本に於て肝要なる牧場の設置に至ては未だ以て完全なる設備あるを聞かず。一、当会社は以上の目的を達成せんが為め設立するものにして、補

益上預託馬の育成、耕作、殖林其他数種の副業を営むにあり。設備已に完全なり。一、尚将来の必要に依り該牧場に育成せられたる馬匹を以て競馬会を設くるの計画なり。一、資本金総額 金一百万円(一株金五十円、総数二万株、発起人及び賛成人引受確定株一万五千株) 一、募集株数五千株…申込取扱銀行 帝国商業銀行、東海銀行本店、丁酉銀行日本橋支店、村井銀行、八十四銀行、小栗銀行東京支店

明治四十年一月 創立委員長 男爵日置健太郎

発起人七十名(其氏名申込書にあり) ○定款目論見書は取扱銀行に就き御受取被下度候。東京市京橋区山城町六番地 吾妻牧場株式会社創立事務所(電話 新橋千〇四十六番)」(40.1.31読売④)

朝日新聞は「其目的純良なる種馬を養成し、傍預託馬の育成耕作殖林等にある由なるも、其実競馬を挙行し巨利を博せん目算なり」(40.5.24東朝①)と、首謀者の本心を見破っていた。

3. 吾妻牧場の設立と小栗銀行

吾妻牧場株式会社は明治40年1月26日発起人総会を「築地同気倶楽部にて開会」(40.1.26読売②)、明治40年5月5日創立総会を「東十目赤坂三会堂に於て開会」(40.5.6読売②)、牛馬売買を目的に資本金30万円、払込10.5万円で麻布区市兵衛町二丁目に設立された。5月10日創立総会で役員¹³⁾を選任した。(40.5.24東朝①) 元北白川宮家経営の浅間山麓の3,000町歩の広大な牧場を明治40年頃松本隆治らの同志が小栗銀行¹⁴⁾からの借入金で払下げを受けた。松本らの計画した明治40年ころは日露戦後の好況期で全国的に「一時

13) 取締役社長牛村一氏(官吏)、取締役日置健太郎、松本隆治、小野沢準一(官塩販売取締役、上菱醤油監査役)、安藤三喜之助(注16)参照)、監査役小栗富次郎、菊池武徳、田中奎次郎(薬種及器械商、旭製薬取締役、)。

14) 小栗銀行は明治31年6月15日愛知県に資本金30万円で設立され、38年4月小倉、38年12月東京、39年12月名古屋等各地に出張店を開設、名古屋市に本店を移転した後、吾妻牧場創立直後の40年5月27日支払停止を発表。

隆盛を極めたる競馬」¹⁵⁾ブームの真っ最中に当り、当時「競馬場ニ引ハレ牧畜事業ハ頓ニ其況ニ向ヒタルヲ以テ」(検査)、拓銀行内部資料によれば融資した銀行側も含めた「当事者ハ該牧場ノ将来ニ付多大ノ望ヲ嘱シ」(検査)ていたと解される。とりわけ日露「戦後幾多の新事業に關係」(M40.6B)していた小栗銀行は38年12月東京日本橋区兜町に東京支店を開設し、東京支店支配人に安藤三喜之助¹⁶⁾を任用した。安藤支配人は吾妻牧場取締役に就任するなど、単なる融資銀行の役割を超えて、多額の買収費の資金調達を可能とする一連の導入預金のスキームをデザインし、資金力と不動産抵当貸付能力に長けた拓銀をグループに巻き込むアレンジまでやっており、不動産投資プロジェクトを自ら立ち上げる投資銀行の役割を果たしている。その結果、日露戦後バブルの崩壊に際して、打撃を受けた名古屋諸行の中でもいち早く破綻に追い込まれた。引き摺り込まれた感のある拓銀側にも、当時小栗側安藤支配人との接点となった拓銀東京支店主任に「別府藤吉」¹⁷⁾なる人物が存在する。「明治四十年四月四日小栗銀行ノ申出ヲ容レ極テ短期ノ約束ヲ以テ当行余裕金十萬圓ヲ同銀行ニ預ケ入レ、小栗銀行ハ之ヲ吾妻牧場主ニ貸付ケ、該牧場ヲ抵当ニ徴セリ。…然ルニ其後該預金ヲ回収セサルニ先チ小栗銀行ハ臨時休業ノ已ムナキニ至リシヲ以テ已ムヲ得シテ、債権保全策トシテ小栗銀行ノ有スル債権ヲ当方ニ転付シ、直接ニ該牧場ヲ抵当トシテ当行ノ不動産抵当貸付ト為セリ。蓋シ該牧場主ハ北海道ニ於テモ牧場ト為スヘキ貸下地アルヲ以テ、漸次其貸付金ヲ該貸下地ノ経営ニ転用セシムルカ否スハ之ヲ返納セシムルノ見込ヲ以テ斯ク取計ヒタルモノナリ」(検査)とされ、その直後の40年5月27

日小栗銀行の破綻で北海道拓殖銀行がやむなく肩代わりした顛末が述べられている(検査)。

4. 吾妻牧場による競馬場計画と挫折

明治40年9月11,12日の両日、吾妻牧場は「馬匹糶売」を実施、「牧場内好位置(従来馬場付近)を選定し一哩半の馬場を本月中に竣成せしめ、爾今毎月二回調教の爲め馬匹の競走を爲さしむ」(40.9.6東朝①)と「馬匹糶売広告」を出すなど、着々と馬券発行への足慣らしを開始した。

「此牧場ヲ基礎トシテ成立シタル吾妻牧場会社ニ於テハ専ラ競馬事業ノ経営ヲ企画シ、遂ニ其許可ヲ得、今ヤ將ニ其之事業ヲ創始セントスル矢先」(検査)、競馬場を計画中の明治41年新刑法実施にあたって、馬券発売は刑法に抵触するとして貴族院で問題視され、明治41年11月西園寺内閣により馬券発行が禁止された。政府は競馬場会社の解散を命じて、新たに倶楽部を設けること、損失には補助金を下付することとした。¹⁸⁾明治41年10月6日政府は馬券の発売を禁止するとともに、同年11月16日我が国初の競馬に関する法律「競馬規程」を公布したのに対し、競馬関係者は馬券の復活を希望した。吾妻牧場株式会社から明治42年2月7日付で有力議員根津喜八に送られた文書¹⁹⁾は馬券禁止令に対する馬券復活運動の動きを具体的に示すものだが、その働きかけが日の目を見るのは大正12(1923)年4月9日の競馬法公布まで待たねばならなかった。東京、埼玉あたりを範囲とする団体だったと思われる武州競馬会と印刷された封筒に、「吾妻牧場株式会社」の印がおされ、次の依頼状が封入されていた。「昨年十月五日発布相成候馬券禁止令は各競馬会を根底より破壊致候而已ならず国民の財産権を蹂躪する

15)『実業家人名辞典』明治44年、ツp13

16) 安藤三喜之助(赤坂区青山南、小栗銀行東京支店支配人(要M40役,p474)、吾妻牧場取締役(帝T5職,p443))。

17) 別府藤馬は三田出身、大正5年2月10日草津軽便鉄道社長に就任。

18)『北九州市産業史』平成10年、北九州市,p67

19) 20) 競馬法25周年記念切手関連
田内昂作「競馬切手」(homepage2.nifty.com/keibastamp)
(平成26年1月9日検索)

ものに有之候。今般別冊写の通り善後策に就て
帝国議会に請願書差出候間、御多忙中恐縮に候
得共御一覽を賜わり公明なる御裁断仰度、得貴
意候也。匆々敬白 明治四十二年一月 東京市
京橋区加賀町十一番地 全国競馬聯合会 根
津喜八殿」²⁰⁾

全国競馬連合会は全国の公認競馬倶楽部の
連絡組織として明治41年3月に結成された団体
「全国公認競馬倶楽部連合会」と思われる。この
馬券禁止で「各競馬会を根底より破壊」すると陳
情した通り、吾妻牧場株式会社の競馬場の計画
も頓挫、「突然馬券ノ禁止ニ遭ヒ全般計画一瞬ニ
シテ画餅ニ帰シ一時茫然自失スルノ状況ナリキ」
(検査)という有様であった。明治42年北海道拓
殖銀行²¹⁾は大蔵省の黒田検査官らによる銀行検
査を受けたが、検査官は吾妻牧場株式会社への
不動産抵当貸付を「異例ノ取引ニ属ス」(検査)も
のとなかなり問題視した。そのため明治42年4月北
海道拓殖銀行は鷺見邦司を現地へ実地調査に派
遣、鷺見行員が記した「吾妻牧場調査概要報文」
(検査)が検査官に提出された。拓銀は大蔵省か
ら指摘のあった「小栗銀行へ貸付金ノ件」に関し
て「右ハ固ヨリ甚タ異例ノ取引ニ属スト雖、其当
時ノ応急策トシテ已ムヲ得サルニ出テ…敢テ一時
ノ權宜法ヲ取りタルナリ」(検査)と極力弁解に努
めた。

明治43年8月吾妻牧場株式会社刊行の『吾妻
牧場内の避暑地開設』(避暑)は競馬場計画が頓
挫した結果、避暑地の開設へと転身しようとする
同社の必死の努力を示す。「明治四一年、会社社
長松本隆治は、北白川牧場跡に地藏川別荘を開
発した」(安島, p94)との記述は、吾妻牧場直営の
避暑地開設を指すものと思われる。

水野豊(後述)によれば吾妻「牧場内に於ける
避暑地としては、最も展望に適する勝地二百五十
町歩ばかりを第一着手として区分し、此れを一町
歩宛二百五十に細分して、各希望者に分与する計
画である。即ち一区画が三千坪もあるから、此中
へ一軒の家を建てても、自然の庭園がなかなか広
い」(紫文, p27)とする。そして断片的ながら「小滝
を西端として東南事務所の方面に向って二百五十
町歩は避暑地である。石止、錦野、花妻、薄ケ池、
薄島、桜岩の各区域に各名称に伴ふ遊園地の設
備が出来る。追って此方面に一大馬場及大弓場
も設けられる事になって居る」(紫文, p61)が、吾妻
「牧場で此計画を立てたのは、やっと昨年からで」
(紫文, p27)、「日本造りの茶席風」の「避暑地第
十五号館」は「数日前に出来上った計り」(紫文,
p26)、「間口七間奥行五間の、総二階建西洋館」
の避暑地「第一号館」は「棟上げをしたばかり」(紫
文, p26)で、水野は「吾妻牧場避暑地計画後、避
暑客として寧ろ私が第一番であらう」(紫文, p28)
などと、詳細に記述している。この頃に構想された
「避暑地」の一部と推定されるのが『東避暑地実
側図』(6,000分の1、「北軽井沢ふるさと館」展示)
である。「群馬県吾妻郡長野原町大字応桑所在」
「一方形百坪 二千坪」の各区画ごとに「北一」と
いった整理番号が付され、予定の「湯沢停留場」
の若干西寄りに「北軽井沢駅」と手書きされており、
おそらく当初の構想図と考えられる。

吾妻牧場株式会社の結末は不明な点が多く残
るが、結局のところ大正4年ごろ経営破綻したと推
測される。萩原秋水によれば吾妻牧場は「時利あ
らず、遂に解散して、其過半を草津鉄道会社が買
受け、一部を避暑地として売却し現今主に都人士
の別荘地となれり」²²⁾と記している。大正5年発行

21) 拓銀は大正13年の草津電気鉄道優先株募集でも
取扱銀行の筆頭を占めるなど、当地との深い関係を
継続していた。

22) 萩原秋水『改訂六版 草津温泉』
草津鉱泉取締所、大正15年, p190

の会社録にあった松本の「模範養魚、草津輕便鉄道、吾妻牧場株式会社各取締役」（帝T5職、p191）の肩書きから、その後吾妻牧場が消えており、同社の収束が確認できる。大正10年では死亡直前まで松本は旧吾妻牧場の一部を引き続き「吾妻東避暑地」（吾妻、p6）の名前で分譲中であった。

経営破綻後の吾妻牧場の資産が債権者等によって競売に付されたと推測されるが、処分の全容は未解明である。例えば草津輕便鉄道は大正4年経営破綻した吾妻牧場株式会社経営の牧場地の過半に当たる300町歩の寄付を受けて、数百区画を別荘地として分譲し、11年には200区画を分譲済であった。入手形態を「寄付」とされているが、小栗銀行、北海道拓殖銀行等から多額の融資を受けていて経営破綻した吾妻牧場が他に寄付する資金的余裕などあるはずもなく、経緯には疑問も残る。かくして牧場の相当部分は草津興業、南木山組合²³⁾、日本鑿泉（後述）、亀沢牧場²⁴⁾、婦恋村営牧場²⁵⁾など、少なくとも数ブロックに分割された模様である。

「北輕井沢ふるさと館」展示中の『吾妻別荘地平面図』（草津電気鉄道・同東京出張所（吾妻川電力内））には亀沢牧場を経営した「亀沢半次郎氏所有地」のほかにも、「田中奎次郎氏所有地」「秋元子爵所有地」「井田栄造氏所有地」「田中銀之助²⁶⁾氏所有地」などの広大な地所が記入されている。これらの多くは吾妻牧場解散前後に処分された牧場跡地の一部と考えられる。吾妻牧場直営の避暑地の中心部分は牧場が解散した後に、草津輕便鉄道（草津電気鉄道）が「吾妻避暑地」として分譲を継続した。この「吾妻避暑地」には不

動産投資家として名高い太田清蔵²⁷⁾ 名義の区画が少なくとも数件、ほかにも南部修三、横山一平、玉村式索道で知られる古河鉱業の玉村勇助など著名人の名も散見される。北輕井沢周辺の別荘地群の中でも最も古くから開発された地区であり、相応の資産家に着目された結果と考えられる。

III 水野豊と日本鑿泉地蔵川別荘地

1. 水野豊

水野豊（荏原郡北品川宿319）は長野県上田に「明治十一年を以て生れた。年少早くも遠大の志望を抱き、奮然東京に出でて…遂に弁護士試験に合格し、法曹界に其名を知らるるに至った」²⁸⁾。明治38年ころ赴任し、3年後の41年2月「今般小生儀新潟地方裁判所を辞し弁護士となり、自今松本法律事務所にて専心法律事務に従事す」（M41.2.24 東朝①広告）と声明したように、松本隆治（前述）の法律事務所所属の弁護士となった。水野自身も大正元年8月17日作成の「雲煙記」の中で明治38年に相当する「八年前の秋…其当時私のゐた新潟」（紫文、p37）、「長男の節夫も実は此<新潟>家で生れた」（紫文、p39）、「私は東京へ出てから、已に五年になる」（紫文、p29）「私の東京の住居は御殿山」（紫文、p36）と述べている。下渋谷氷川町382に住み、弁護士の傍ら、衆議院議員（紳T11、中p149）、中央商業銀行監査役（要M44、役、p360）、松本との縁で日本鑿泉合資会社代表社員、模範養魚、草津輕便鉄道各取締役、中央商業銀行監査役（帝T5職、p191）、東洋化学工業研究所取締役、亜細亜興業監査役（要T11、

23)「南木山下戻し」運動で所有するに至った南木山組合は農科大学から実習林にしたいと「南木山を三、四万円位で譲っては呉れまいか」（村誌、p1169）との交渉を受けたが、値段が折り合わず流れたあと贈収賄事件が発生し「何れも成功しないで終わった」（村誌、p1170）

24) 亀沢牧場は亀沢半次郎が小菅、田通等に新たに開き、農耕作や酪農を行った。

25) 婦恋村が村営牧場を運営した後、紆余曲折を経て昭和6年群馬県畜産組合連合会が浅間牧場を経営した。（『きたかる』2号、p4）

役下, p162) など多数の会社役員を兼ねていた。大正12年9月1日大震災で被災し、日本鑿泉「本社並社長水野豊以下社員工員全部無事…弁護士水野豊 一同無事左ノ所へ事務所移転致候。重要書類安全 東京市丸ノ内仲通三号館」(T12.9.14 東朝夕③) と日本鑿泉本社と関係企業の東洋化学工業研究所を弁護士事務所内(丸の内3-12仲三号館)に移転した。草津軽便鉄道時代から取締役に就任していた草津電気鉄道の社長に昭和10年8月23日就任²⁹⁾、日本鑿泉合資会社代表社員、自動車界社³⁰⁾、東京弁護士会長、法律新報社長、日満法曹顧問(S13.10.11読売⑦、S13.10.11東朝⑪)等を兼ねた。

趣味として「私は十二三の時代から俳句が極めて好き」(紫文, p36) で「『六山人』と号して俳句をよくした」(S13.10.11東朝⑪) が、昭和2年ころから北軽井沢で林間俳句学校を主宰、「当会社取締役水野豊氏主催の林間俳句学校第二回講演会開催」³¹⁾、草軽電鉄「吾妻」駅近くには「俳句伝習館」と呼ばれた建物も出現した。昭和2年ころ万座温泉に「豊国館が開業…館主水野豊氏は日本弁護士会々長、俳句界にも重きをなして六三人と号す。万座に北軽井沢から林間俳句学校を移築して以後毎年俳句学校を開く。…この館の支配人は豊氏弟の水野富作氏であった」(村誌, p2291) と、弟に旅館を経営させた。昭和13年10月10日「所用で大阪へ赴く列車中心臓麻痺を起して」(S13.10.11東朝⑪)、脳溢血で急死、享年61であった。(S13.10.11読売⑦)

2. 日本鑿泉

大正2年日本において最初に本格的な深井戸掘削に成功³²⁾した日本鑿泉合資会社は明治45年4月松本隆治により「上水道灌漑用工業用遊園地噴水用等鑿泉請負事業」を目的として麹町区有楽町1ノ1に資本金12万円で設立され、代表社員松本隆治が11万円を出資、パートナーの弁護士水野豊が残り1万円を出資した。(帝T5, p61) この日本鑿泉も創業「当初は各種の困難に遭遇し…経営転た惨澹を極め」³³⁾、すなわち「東京府下落合村(現・東京都新宿区下落合)において、アメリカ製のロータリー式鑿井機で深さ160メートルの深井戸を掘削」³⁴⁾した際に経営危機に陥った模様である。

3. 日本鑿泉の地蔵川別荘地

大正12年時点の「日本鑿泉合資会社経営地蔵川別荘地」の様子は『草津軽便鉄道沿線案内』の金子常光画伯の鳥瞰図に地蔵川駅前に「法政大学村」開設前の「松室致氏経営地蔵川避暑地」とともに描かれ、「丸の内仲通三号館日本鑿泉合資会社々長水野豊之<地蔵川別荘地>を経営す。海拔凡三千六百尺、一定の区画をなし衛生的高原別荘地として分割譲渡をなしつつあり。已に建築せられたるもの地蔵川倶楽部を初めとして十余棟あり。懇切に旅客を待遇す」(沿線)と紹介されている。大正13年の『吾妻別荘地平面図』(「北軽井沢ふるさと館」展示)には地蔵川駅の東西に「日本鑿泉地蔵川別荘地」の区画が細かく描かれ、その東北側は「松室氏経営地蔵川避暑地」につながっている。駅前には前述の地蔵川倶楽部や売店、

26) 大正後期に建てられた田中銀之助の別荘が「ルオムの森」に残る。

27) 太田清蔵は北海道の北門銀行を介して、実質的に「草津電気鉄道株式会社ニ対スル貸付ヲ為シ居レリ」(拓銀への「大蔵省検査示達草案」昭和9年8月、拓銀文書)とされるなど、当地にも古くから関心を示し、草津電気鉄道経営地内にも数区画投資していた。

28) 柏村一介編『昭和国勢人物史』極東社出版部、昭和3年, p56~58。

29) 『草軽交通の歩み』草軽交通、昭和48年, p2

30) 『丸之内紳士録』昭和6年, p308

31) 草津電気鉄道『第十六回営業報告書』昭和2年12月

32) 34) 田尻稲次郎『地下水利用論』洛陽社、大正4年, p14

運動場が所在する。建築済みの「十余棟」に相当する水野豊本人をはじめ大区画として川西清兵衛、市毛谷右エ門、森田ハツ、戸谷佐治、和泉惣左エ門、井ノ口吉松らが目に付くが、資産家・著名人はむしろ駅から遠い方の草津電気鉄道経営の「吾妻別荘地」に多いように思われる。

水野は近辺の「溶岩溪(旧鬼の押出岩)」に着目し、大正11年旧浅間牧場経営の縁がある「北白川宮大妃殿下地蔵川駅より押出の壮観を觀賞せられたるを紀念として、地蔵川別荘地経営者水野豊之れに溶岩溪の新名称を付して広く宣伝為しつつあり」(沿線)と堤康次郎(堤, p208)より先に鬼押出しの開発を計画した。

IV 小西栄三郎と宮崎寛愛

次に取り上げる小西栄三郎と宮崎寛愛はともに地蔵川一帯で別荘地開発を行った投資家グループの有力メンバーである。この二人を繋ぐ人物として宮沢高義³⁵⁾がおり、彼は、大正11年では小西栄三郎が社長の小西商事専務、宮崎寛愛が社長の中外勸業取締役、宮崎寛愛が監査役の日本図書出版取締役(要T11, 役下p168)を兼ねた。また高橋清方(神田区小川町41)も中外信託取締役(帝T5, p122)、中外拓殖取締役、小西商事監査役、日本図書出版取締役(要T11, 役中p47)などを兼ねたので、これらの会社・役員らは一種の利益共同体を構成していたものとみられる。そもそも彼らが当地に関与した経緯は明らかではないが、メンバーの宮崎寛愛(後述の通り長らく北海道開拓に従事)が主宰した中外拓殖の大正15年8月の増資

優先株募集³⁶⁾を取り扱ったのは拓銀であり、同社の主要所有地が北海道に集中していることからみて、北海道開拓時代以来の拓銀との深い関係が窺える。同社が主力の北海道から遠く離れた北軽井沢方面の土地を取得した背景も、恐らく前述の拓銀の不良債権たる吾妻牧場の処分の一環であろうと推測される。

1. 小西栄三郎

小西栄三郎は明治14年7月栃木県の小西氏徳の三男に生れ、信濃民報、信濃毎日新聞各主筆、時事新報記者時代には東京市長阪谷芳郎と「大博の件を談話」³⁷⁾、その後大正4年実業界に入り³⁸⁾高柳津之介を名乗って、「余は啻に相場ばかりの研究者ではない、経済学、家政学、特に金銭利殖法の研究者である」(T6.6.18読売 広告)と称した高柳淳之助の兄弟分として行動を共にし、富強世界社取締役社長として「本邦唯一の相場専門雑誌」を自称する『富強世界』誌上で株式前途観を展開するとともに、5年『大正成金伝』を富強世界社から、同年高柳と共著で『借金整理法』(179頁)を富強世界社から刊行した。6年には「富強世界社々長小西栄三郎氏今回戦時経済状況視察の為め渡米」(T6.8.12読売⑤)した。大正7年小西栄三郎自身が主宰する小西書店(京橋区南八丁堀1)から相次いで『金は金を生む』『一攫千金 一名最新欧米成金物語』(243頁)(T7.11.19東朝⑥/T7.12.12東朝⑥)等を出版した。このころ、株式利殖研究会を組織するなど、盛んに成金熱を煽って内田信也、山本唯三郎、神田蔵蔵、村井吉兵衛、安部幸兵衛、木村ユウ子らの成金連中

33) 田尻稲次郎「地下水の利用」(T3.9.26読売③)

35) 宮沢高義(北豊島郡巢鴨町)は大正5年では中外信託社長、中外興業銀行取締役(帝T5職, p264)

36) 羽島知之「新聞広告美術大系 大正編」第5巻、平成15年, p25

37) 阪谷芳郎『阪谷芳郎東京市長日記』芙蓉書房出版、平成12年, p231

38) 44)『一九二四年に於ける大日本人物史』大正13年、こp36

39) 住ノ江佐一郎『わが国証券理論の展開と文献』昭和56年, p57、小林和子『日本証券史資料戦後編 別巻1証券関係文献目録(明治・大正・昭和)』平成元年

を礼賛、読者の成功欲・蓄財欲を誘発した。その他にも『大相場の来否及其特質』(利殖之友社、大正8年)『致富成功の一本道』等を著し、その多くは我が国の証券史の文献としても扱われている。³⁹⁾

富強世界社大株主は高柳前社長1,500株、大迫専務2,225株、小西社長150株、5年1月の科料十五円事件の弁護士・真下五郎取締役100株、弁護士の中村泰治監査役(紳, S3, p551) などであった。「今回本社は組織変更、大発展一周年記念」⁴⁰⁾とあるので、6年2月に大迫を主体とする富強世界社の「組織変更」が行われ、表面上高柳が退任したものと考えられる。高柳は富強世界社社長を退き、単に1,500株の大株主の座について、同社の経営を新社長の小西栄三郎(150株主)と、「高柳淳之助の四天王」(T14.9.29東日)の一人で専務の大迫利亮(2,225株主)にゆだねた。小西栄三郎は6年5月時点で麻布区市兵衛2-60 会社員、開業…正味身代未詳、収入未詳、取引先の信用の程度Ca(5段階中の中位)、所得税…円であった。(商, T7, p464)

こうして大正7年には小西自身が営む小西書店(神田区小川町41)を創業し宮井宗兵衛を大学館から招聘して出版部長に据え⁴¹⁾、利殖雑誌『利殖之友』を月2回も発行したため、富之研究社[後に東京貯金新聞社に改称(帝, S2, p93)]を主宰して月刊雑誌『富之研究』(『貯金之研究』を改称)『土地の世界』『一万円貯金』『東京貯金新聞』等を発行して「稀代の吸血漢高柳淳之助」⁴²⁾とは競合関係になり、次第に疎遠になったと考えられる。大正11年時点では京橋区南八丁堀、大正バブル期には

主要産炭地から離れた山形県の炭坑⁴³⁾にも関わり、8年6月田川炭礦を設立して代表取締役となったほか、帝国石膏、東京アニリン染料、東洋農具取締役(帝T11, p427)を兼ね、「小西栄三郎氏は他の企て及ばざる特殊の技能を有せらるる…手腕家」(吾妻, p8)と自画自賛していた。大正12年時点の小西栄三郎の評伝からは過去の高柳関係の経歴は消され、日本図書、小西商事、原機械、東洋文芸各社長、田川炭礦、帝国石膏各専務、日本物産、東京アニリン、日本セルロイド各取締役⁴⁴⁾、東洋クロス監査役などを兼ねた。

昭和4年に「編者小西君は昨<4>年長らく此等の地を旅行して実地調査を踏み」(S5.7.11読売④)、その成果として昭和5年聖山閣から小西栄三郎編『最新・朝鮮満洲支那案内』を刊行(S5.7.11読売④)したが、炭坑などにも強い関心を示している。小西栄三郎は「永井荷風に師事した邦枝完二を実質的な編集者」とした雑誌『劇壇』を引き受けたり、雑誌『利殖の現在』の刊行、「一戸直蔵のファンで『現代之科学』の経営を引き受けた出版社経営者」⁴⁵⁾と日本の科学ジャーナリストのパイオニア一戸直蔵博士の主宰する『現代之科学』の経営を「人生意気に感じて一戸にほれこみ、採算をはなれて経営一切を引き受ける」⁴⁶⁾など、「小西栄三郎は普通の出版社経営者ではなかった」「普通は出版社側はもっぱら裏方にまわり、自らは書かないものであるが、小西は志の出版人とでもいうのか、意見を署名入りで雑誌に…」⁴⁷⁾とも評されている。なお、著作権法違反恐喝被告事件で被告人⁴⁸⁾となっている。

40) 大迫利亮『株式の内容と其真価』大正6年、巻末広告

41) 鈴木徹造『出版人物事典平成物故出版人』平成8年, p285

42) 大浜孤舟著『暗黒面の社会・百鬼横行』大正15年、新興社, p115～125

43) 山形県の炭坑は拙稿「鉱業投資とリスク管理(序説)―鉱業リスクの諸態様を中心として―」『彦根論叢』第355号、平成17年9月参照。

45) 47) 中山茂『一戸直蔵 野においた志の人』シリーズ民間日本学者19』リプロボート、平成元年, p227。

46) 中山茂『転換期の科学観察』昭和55年, p61

2. 宮崎寛愛

宮崎寛愛(高知県)の前半生は北海道開拓に深く関わっている。彼は宮崎義助の子、宮崎簡亮⁴⁹⁾の甥に生れ、早稲田出身、明治27年紋別郡湧別村へ入殖、明治28年入殖団体として北海道殖民協会を設立した。入殖当時の証言として「団体を連れて入植した人だが、引率してきたときは、早稲田の角帽を被りまだ学生時代の時だった…移住民に芋を作らせてその芋を船で東京に運んで売り捌いてやるということだったが、着いてみたら芋がすっかり腐ってしまって売れなかった」⁵⁰⁾とある。寛愛は自伝「翠柊覚書」で「遂に北見国に於て、有望なる好殖民地を発見し、同国常呂・湧別・渚滑の三原野に植民を計画し、その翌年、即ち明治二十七年、前述土地(発足村<現在の共和町>の10万坪)売却代金を以て運動費に当て、郷里高知県に赴き、団体移民を組織し、爾後五年間、殖民を継続し、開拓の奨励につとめ、総人員貳千余人を移了し、明治三十五年に至り、全部成功を告げたり」⁵¹⁾と回顧している。

その後の大正バブル期には北海道開拓の先覚者という側面が薄れ、高柳や小西と同類の投機家としての性格が濃厚となる。大正5年では小石川区大塚町69に住み、中外興業銀行⁵²⁾取締役、中外信託(後述)社長(帝T5職, p264)、大正9年では小石川区小日向台町1の44、「衆議院議員候補者 東京府第十区(小石川区) …政党政派に偏せず立候補を宣言す。選挙界の弊風を打破すべく、理想選挙の主義に基き情実的戸別訪問其他非立憲の行動に出でざることを誓ふ」(T9.5.1 読売①

広告)と立候補を宣言した。中外勸業、中外信託各代表取締役、日本図書出版(小西栄三郎が関係)監査役(要T11, 役下p169)、中外勸業社長(諸S10, 上, p197)等を兼ねていた。宮崎寛愛が取締役の一員となってグループの機関銀行として活用していた中外興業銀行は「震災前より休業せるもので、何れも疾くに曰くつきのもの」(T12.12.1T)と報じられており、昭和2年銀行業を正式に廃業した。また後述する「中外拓殖という土地会社を作ったが、満州までも手を広げ各地に出張所を作ったが、山師気のある人」⁵³⁾とされ、中外拓殖等への投資で大損させられた開拓民の名も列挙されている。前半生を土台にして、リスクの高い後半生に乗り出した結果、こうした被害者が多く発生したものと考えられる。

3. 小西商事と吾妻土地建物

小西商事は大正9年5月設立、京橋区南八丁堀一ノ四[=日本図書出版の本社所在地]、資本金50万円、払込額25万円、専務宮沢高義、取締役安仲三郎⁵⁴⁾、取締役桜高普行⁵⁵⁾、監査役高橋清方[神田区小川町41、中外信託取締役(帝T5, p122)、日本図書出版取締役(要T11, 役中p47)]であった。「小西商事株式会社は主として土地の売買以外資金の貸付、有価証券の売買等其の営業多岐に亘り、各部平等に資金の分配をなさざる可らざる状態に在りまして別荘地のみに多額の資金を固定せしむるの困難があります故に、茲に新たに当会社を創設して別途の資金を蒐集する次第」(吾妻, p3)と吾妻土地建物の創立趣意を述べ、小西

48)『著作権百年史年表』昭和44年, p91

49) 宮崎簡亮は明治11年開拓使御用係、道庁営繕課長、北海道開進社副社長、のち社長。北海道開進社は北海道開拓を目指した最初の殖民会社であるが、その後内部分裂と資金不足のため失敗。

50) 53)「錦町百年史 第3章」

(www.phoenix-c.or.jp/~ryousi/sub113.htm)

錦町開基百年記念史 百年の星霜 昭和の小漁師
平成26年1月9日検索)

51)『翠柊覚書』(2008/02/28開進社、北見国の土佐団体歴旅・温泉、そしてチョット釣り
～北海道の歴史と文化: 開進社、北見国の
HOkkaidonobunka.sapolog.com/e4277.html)

52) 中外興業銀行は関東大震災による東京市内の休業銀行「十一行」(T12.12.1T)の一つとして『東洋経済』誌が取材するも一切情報なく、大蔵省「銀行事故調・全」等にも情報がない。昭和2年6月20日中外興業銀行は業務を廃止して

栄三郎の傘下にある小西商事と新設する吾妻土地建物の役割分担について「両会社共に其の有望土地を所有し…小西商事株式会社は主として土地の売買に重きを置き、吾妻土地建物株式会社に於ては別荘地住宅の建築請負、別荘地の重要交通機関たる乗合自動車の経営、日用品の供給等を兼営せんと欲する」(吾妻, p2~3) と説明していた。

吾妻土地建物の創立委員長は小西商事社長の小西栄三郎であった。『創立趣意書』の中で「有望土地無代進呈 破天荒の新計画! 好機再び来らず」を謳い、「当会社ノ株式申込者ニ限り一株ニ対シ三坪宛ノ割合ヲ以テ有望別荘地ヲ無代進呈ス。進呈ノ土地ハ群馬県吾妻郡嬭恋村ニ属シ、東洋唯一ノ別荘地タル軽井沢ト、世界一ノ温泉ト呼バルル草津温泉トノ中間ニ位シ、将来東洋第一ノ避暑地タル可キ有望土地ナリ…進呈土地ハ創立委員長タル小西栄三郎氏ガ同別荘地宣伝ノ功勞ニ依リ、関係地主ヨリ贈呈ヲ受クルモノニシテ、会社ノ所有地トハ別個ノモノナリ…将来地価ノ騰貴ニ依リ、株ハ唯儲ケトナルノ時機アルベシ」(吾妻, p1) との新商法の宣伝に努めている。『創立趣意書』に添付された地図を見ると、次項の中外拓殖の嬭恋避暑地や中外勸業の嬭恋村の別荘地と重複している。こうした関係地主より「別荘地宣伝の報酬として…小西栄三郎氏が取得す可き土地」(吾妻, p9) とは、両社の他に「中外信託株式会社…と中外勸業株式会社…とがありまして、以上四会社が協力して此別荘地の大計画を遂行…此の外にも隣接地に別荘地を経営して居るものに草津軽便鉄道株式会社と松本氏の吾妻東避

暑地とがありまして、是等の各会社が共同的大宣伝をなし、同時には理想的の大設備をする」(吾妻, p6) 一種の販売シンジケートが成立していたと考えられる。そうした関係地主間の販売協定の中で、『利殖ノ友』などの利殖雑誌を定期的に発行している小西が「別荘地宣伝の報酬として…取得す可き土地」を定めていたのであろう。特に人的にも関係⁵⁶⁾の深い小西商事、吾妻土地建物、中外信託、中外勸業の「四会社」間では共通の「観光デザイン」が策定され、さらに草津軽便、松本をも加えた広域連合による共同宣伝まで意図されていたことは別荘地の販売形態としても大変興味深い。

この吾妻土地建物の株主募集の甘味剤として小西の取得地を添付した方式⁵⁷⁾ 自体が、小西がデザインした「共同的大宣伝」の一環として推進されたものと思われる。資本金15万円(全額払込済)、公募2,000株を大正10年3月1日より4月1日まで募集、1株につき金5円「申込ト同時ニ申受ク」、申込単位5株以上、「他ハ発起人賛成人ニテ引受済」、「募入方法 発起人ニ於テ適宜決定ス」(吾妻、扉) とある。定款第6条で「当会社ノ公告ハ東京市内ニ於テ発行スル雑誌『利殖之友』ニ掲載ス」(吾妻, p15) と、小西書店との連携をしっかりと確保していた。しかし、『銀行会社要録』の大正11年版には吾妻土地建物という会社は東京府、神奈川県、群馬県、長野県、福岡県などに掲載されておらず、小西栄三郎の兼務先(要T11役下, p35)、宮沢高義の兼務先(要T11役下, p168)にも該当がないので、会社としては成立しなかった可能性⁵⁸⁾もあろう。

中外興業へ改称した。(変遷, p505)

54) 安仲三郎(千束村)は千束銀行(福岡県築上郡千束村、資本金12万円)、小西商事各取締役(要T11, 役中p208)

55) 桜高普行(三毛門村)は小西商事取締役(要T11, 役下p126)。この福岡県築上郡の両名の役員との因縁は未詳。

56) 高橋清方(神田区小川町)は小西商事監査役、中外信託取締役を兼ねた。

57) 草津電気鉄道の『吾妻別荘地平面図』

(「北軽井沢ふるさと館」展示)に松室致らから寄付された「無償提供予定地」として描かれている同種の土地給付による増資スキームは拙著『企業破綻と金融破綻』九州大学出版会、平成14年, p479 参照。

58) 『明治～昭和前期営業報告書目録集覧』神戸大学、昭和49年に該当なし。

4. 吾妻土地建物による「吾妻避暑地」

「孀恋避暑地」経営

地蔵川駅と手前の吾妻駅と間の線路東側一帯を「吾妻避暑地」、隣接する鹿沢温泉側一帯を「孀恋避暑地」と区分した。軽井沢の西・沓掛から、孀恋駅の間に「乗合自動車線」を記入し、「今回当会社では信越線沓掛駅から別荘地迄四里の道を乗合自動車を通はせようとして居ります」（吾妻、p5）とした。また高崎から、渋川～中ノ条～河原湯温泉～長野原～孀恋駅～上田方面まで、点線で「鉄道予定線」を記入し（挿入地図）、「鉄道省は近く信越線を群馬県高崎駅から分岐させて、長野県上田駅へ通ぜしめる計画で…吾が孀恋避暑地を去る僅か一里の処を此の鉄道が貫通し、別荘地付近に停車場の新設を見る予定」（吾妻、p5）と期待を持たせていた。しかし実際に国鉄長野原線（現・JR吾妻線）が開通したのはずっと後年の昭和20年である。

5. 中外拓殖（旧中外信託）と中外勸業

中外拓殖株式会社は明治44年12月不動産売買仲介を目的に中外信託株式会社として資本金5万円で東京に設立され⁵⁹⁾、大正5年では本社を東京市日本橋区本町一丁目13に置き、同系の「中外興業銀行代理店」となっている。大正2年12月静岡県の横須賀銀行を買収し、東京市日本橋区本町一丁目十三番地に移転した上、中外信託の名に合わせて中外興業銀行に改称し、自己の機関銀行としたものと考えられる⁶⁰⁾。大正8年では資本金5万円、本社東京、不動産売買仲介（『会社通覧』大正8年調査、p128）、本社を中外勸業と同じ日本橋区本町1-13に置き、資本金100万円、払込287,500円、社長宮崎寛愛（中外勸業代表取締

役）、取締役小森徳之、藤原由太郎（要T11、役なし）、川<田か>内幸治〔要T11、役なし、田内幸治（赤坂区青山南5）は中外勸業監査役（諸S10、上、p197）、中外拓殖監査役（諸S10、上、p198）〕、監査役森沢菊吾〔小石川区大塚町69、中外勸業、中外信託各監査役（要T11、役下p225）〕であった。（要T11、p114）

大正5年の中外拓殖役員は社長宮崎寛愛、宮沢高義（前述）、石川雄之助⁶¹⁾、森沢菊吾らであった。中外信託は「最近松島肇氏の昌榮貯蓄銀行に対し二万七千五百余円の預金払戻の請求訴訟を提起したるが、右は会社第一回払込金（此株数二千二百五株）に関する預金の由なるが、欠陥多き会社の事なれば其間には種々の事情の存在す可きは想像に難からざる所」（T10.5.8内報②）とされた。信託業法施行⁶¹⁾により中外信託は信託業を廃止して中外拓殖と改称したと解される。

中外拓殖株式会社は「明治四十四年資本金僅ニ三万円ヲ以テ創業茲に十有五年、此間土地経営ニ主力ヲ注ギ相当ノ成績ヲ挙げ…現在所有地ハ主力ヲ殆ンド北海道ニ集注シ各主要都市ヲ網羅セリ…以上ノ外当会社ノ所有地ハ東京市内、湘南地方、軽井沢方面等十七ヶ所ニ互リ時価四百余万円」（『増資優先株募集』T15.8.25東朝④）と自賛した。長年古地図を蒐集されてきた建築家・山下和正氏旧蔵の『旭川市中外拓殖株式会社所有地連絡図』⁶²⁾は、こうした中外拓殖の道内所有地の中の旭川市が確認できる資料である。昭和9年時点では東京市京橋区榎町二丁目、資本金200万円、払込高125万円、社長宮崎寛愛、取締役秋山貞三〔麻布区龍土、中外勸業取締役（諸S10、上、p197）〕、石崎清一〔大森、馬込、中外勸業取締役（諸S10、上、p197）〕、監査役田内幸治

59) 農商務省編『会社通覧』大正8年12月末現在、p128

60) 社長宮崎寛愛、取締役小森徳之（日本橋区本町の質店主）、五味栄、高橋清方（神田区小川町、日本図書出版取締役）、監査役山田勤（帝T5、p122）。

61) 麻島昭一『日本信託業発展史』有斐閣、昭和44年、p154～163。

62) 53×77cm、多色刷、年代不明、「古地図（山下氏関連）」岐阜県図書館（www.library.pref.gifu.lg.jp/map/worlddis/mokuroku/yamasita.htm）平成26年1月9日検索）

[赤坂区青山南5、中外勸業監査役(諸S10, 上, p197)、小森亥八[小石川区白山御殿]であった。(諸S10, 上, p198)

6. 中外拓殖による「嬌恋避暑地」

「嬌恋ホテル」経営

前述の『吾妻別荘地平面図』の西端には「古滝遊園地」が描かれている。大正12年の『草津軽便鉄道沿線案内』金子常光の鳥瞰図には桜岩地蔵尊の奥に、「中外拓殖株式会社経営嬌恋避暑地」「中外拓殖株式会社経営古滝遊園地」が描かれ、裏面の「沿線ノ名勝」には「中外拓殖株式会社経営の嬌恋避暑地は、地蔵川別荘地に連り、総計一百六十余万坪の地積を有し、其内大部分は已に分割をなし、古滝付近には二百余坪の嬌恋ホテルを新築し、＜大正12年＞八月より開業せり。其外古滝遊園地並に大運動場の新設も計画中にて、目下工事を進めつつあり、将来電灯、電話の設備、自作の農場にて出来る新鮮なる果物野菜は素より其食料品並に日用品の配給を企画する見込みなり」(沿線)と詳しく説明しており、草津軽便鉄道と中外拓殖とが友好的に連携していることが判明する。

「小滝を西端として東南事務所の方面に向って二百五十町歩は避暑地である。石止、錦野、花妻、薄ヶ池、薄島、桜岩の各区域に各名称に伴ふ遊園地の設備が出来る」(紫文, p61)との吾妻「牧場で立てた」(紫文, p27)計画に相当するもので、中外拓殖の古滝遊園地も吾妻牧場からその構想を継承したとみられる。大正12年「今回の分譲の土地は一画五百坪、坪平均二円」(沿線)の要項で分譲した。昭和4年「中外拓殖株式会社も又この地に別荘地開発を試み、数十軒の貸別荘及び、設備

完備した嬌恋ホテルの経営をして居ります」⁶⁴⁾、昭和6年「草津電鉄北軽井沢付近 中外拓殖会社経営の文化村等がある、モダン別天地が建設されて居ります」⁶⁵⁾とある。昭和6年7月には「嬌恋ホテル出張所」の名前で「嬌恋高原の簡易貸別荘信越線軽井沢駅より草津電車北軽井沢下車、海拔三千七百尺の高原。白樺と落葉松とに囲まれたスマートな小別荘の村。半洋風。湯殿。水道。電灯完備。夏中三十五円・四十五円(一日ぎめ二円・二円半) 至急案内書の御請求を乞ふ。東京浅草南元町(電浅草二六〇八) 嬌恋ホテル出張所」(S6.7.20読売夕②)と貸別荘の広告を出した。中外勸業は昭和10年時点で群馬県吾妻郡嬌恋村に嬌恋出張所を置き(諸S10, 上, p197)、嬌恋周辺での「土地経営及分譲」(諸S10, 上, p197)を行ったが、嬌恋ホテルの経営主体は姉妹会社の中外拓殖株式会社であった。

7. 中外勸業

中外拓殖の姉妹会社と目される中外勸業は大正6年8月帝国セメント⁶⁶⁾として設立後(T10.5.8内報②、T6.8.8内報①)、商号変更を繰り返して中外勸業と改称した「内容極めて空虚にして、加ふるに会社関係者に名古屋の東洋セメント会社を買収すると称して多くもあらざる…社金を消費して遂に刑事事件を惹起」(T10.5.8内報②)するなど曰く付きの泡沫会社とみられる。帝国興信所は「一会社の株式実質に驚くべき矛盾あるに照らし、東京、大阪の孰れか一方が世人を欺罔せるものなるは勿論…其黒幕に当該会社の潜める在りて、現物商の手を藉り未募入れ株の処分を敢てせんとするに外ならず」(T6.8.23内報①)と談じた。その後も社名を化学窯業、大日本工業(要T11, p113)、大

63) 石川雄之助(荏原郡入新井町新井宿)は帝国セメントから化学窯業、大日本工業、大正9年12月中外勸業と次々と改称した(T10.5.8内報②) 嬌恋ホテル経営の中外勸業、日本消防機製造各取締役(要T11, 役上p51)、大宮遊園地監査役(諸S10, F, p5)

64) 『軽井沢・草津遊覧案内』昭和4年1月

65) 『軽井沢と付近鳥瞰図』昭和6年8月

66) 井田武雄は帝国セメント発起人総代、大日本農産、大日本塩業各取締役、日本商業会社支配人(帝T5職, p1)、博善、日本洋瓦各監査役、火葬船葬取締役(要T11, 役上p2)

正9年12月中外勸業と次々と改称、「営業目的をも土地建物有価証券の売買貸借仲介をなす事となし、現在は群馬県吾妻郡嬬恋村の土地を別荘地として売買若しくは貸付けに主力を注」(T10.5.8内報②) いたものの、草津軽便鉄道吾妻駅より十数町で「交通不便なれば一等地坪三円、二等地坪二円、三等地坪一円前後を以てしても充分買人なき状態にして、会社としても経営には相当苦心の模様」(T10.5.8内報②) とされた。大正11年時点では東京市日本橋区本町1-6、資本金50万円、代表取締役宮崎寛愛、取締役伊藤為治、坂本太一郎[小石川区林町96、中外勸業取締役のみ(要T11, 役下p120)]、白滝藤平[栃木県芳賀郡山前村、真岡酒造、中外勸業各取締役(要T11, 役下p186)]、宮沢高義(前出)、石川雄之助(前出)、太田正一[栃木県芳賀郡七井村、大日本工業取締役のみ(要T11, 役上p155)]、監査役井田武雄⁶⁶⁾、森沢菊吾(前出)であった。(要T11, p113)

昭和9年時点では東京市京橋区榎町二丁目、資本金50万円、目的「土地経営及分譲」(諸S10, 上, p197)、社長宮崎寛愛(前出)、取締役大原富治郎[豊橋、花田]、石崎清一[中外拓殖取締役(諸S10, 上, p198)]、秋山貞三[中外拓殖取締役(諸S10, 上, p198)]、監査役田内幸治[中外拓殖監査役(諸S10, 上, p198)]であった。(諸S10, 上, p197)

V むすびにかえて

本稿で取り上げた①松本隆治、②水野豊、③小西栄三郎、④宮崎寛愛という4人の異色の別荘地経営者の「観光デザイナー」としての資質の程度を比較してむすびにかえたい。4人の本職・前職はそ

れぞれ①、②は弁護士、③利殖専門のジャーナリスト、④開拓民であるので、一般的に持てる能力としては①、②法律知識、弁舌力、③金融知識、④忍耐力などが考えられる。彼らが現実に着想した別荘地の観光デザインの内容では①広大な開発用地の確保、競馬から別荘地への転換、観光鉄道の敷設、②前任者からの継承、③甘味剤を添付した投資の勧誘、④ホテル兼営などである。

この結果、次々と新しい構想を打ち出して実現に結び付けてきた①の松本隆治の果たした役割の大きさが判明する。これに対して松本の後継者たる②水野豊は大きく成長させていく過程で関係企業のマネジメント能力に優れていた反面、革新的な発想力では松本とは差があったように思われる。ただし、俳句を愛する文化人でもあった水野は俳句学校を主宰するなど、観光企業と地域コミュニティとの融和に努めたり、万座温泉に個人で温泉宿を開くなど、地域貢献にも配慮していたようである。

次にある種の提携関係にあり、ほぼ同一の領域で活動した③小西栄三郎と④宮崎寛愛との間でも観光デザイン能力に差異が認められる。③小西は豊富な金融知識を駆使して新たなスキームを着想したものの、実現性においてやや疑問が残る結果となった。小西はその後リゾート分野から離れて、むしろ出版業に専念、小西書店の独自の営業基盤を形成することに成功し、前半生の高柳の同類との世間の偏見を払拭できたようである。これにたいして④宮崎はリゾートを含む不動産業に果敢に手を広げたものの、前半生の功績を台無しにするような不首尾に終り、小西と明暗を分けたようである。

松本は同僚弁護士として手堅い水野を選び、事業経営上のパートナーにも引上げ、後継者として後を託したため、松本の手掛けた吾妻牧場は解散に追い込まれたものの、自ら創業した日さく（旧日本鑿泉）は今も観光立国に大きく貢献する主要企業として盛業中であり、吾妻牧場がパトロンとなって敷設した草津軽便鉄道も草軽交通として同地で盛業中である。また十分に解明するには至らなかったものの、経営破綻した吾妻牧場の広大なリゾート候補地を草津軽便鉄道、日本鑿泉その他自分の息のかかった先に都合よく継承させた手際の良さは、さすがに敏腕弁護士だけのことはあるようだ。ハイリスクのリゾート事業のリスクマネジメントとして、松本＝水野組はお互いの欠点を補完しあうコンビネーションが絶妙であった。

著名な堤康次郎⁶⁷⁾や歴代星野嘉助⁶⁸⁾の「観光デザイナー」としての資質はおそらく、良くも悪くもこの4人のレベルを格段に超えていたように思われるが、軽井沢に縁の深い堤、星野両家等の長期永続した観光ビジネスとの比較検討は今後の課題として残された。

67) 滋賀大学在任当時、種々のご指導を賜った森將豪教授には、ご尊父であられる森喜造氏へ湖国の観光事情を拝聴したい旨お願いしたことがあった。ご健康が許さず実現をみなかったが、堤康次郎の遺風等を知り得たかもしれないと当時のことを懐かしく思い返している。

68) 観光カリスマである星野佳路氏は父・嘉助を「ファミリービジネスは長く続いてきたという点で、事業として確かな基盤があります。父はそれを守り、成長させました」(H26.2.5日経夕^⑨)と評した。

Ryuji Matsumoto and Hirochika Miyazaki, Tourism Designers Who Strived to Develop Mountain Resorts Based on the Karuzawa Model

From the Viewpoint of Risk Management

Isao Ogawa

The Kitakaruizawa area is located north of Karuizawa, a famous mountain resort in Nagano Prefecture built by foreign developers in the mid-Meiji Period. Despite the resemblance in name, the former is part of Gunma Prefecture, while the latter is situated in Nagano. Kitakaruizawa is one of many resorts that were developed around the famous and prestigious Kyu-Karuizawa, or the original Karuizawa, in an attempt to capitalize on its high status. Among such developers, Yasujiro Tsutsumi and Kasuke Hoshino, founders of the Seibu Group and Hoshino Resort respectively, achieved great success in building holiday resorts to the west of Kyu-Karuizawa.

Being located in different prefectures meant that Kitakaruizawa never merged with Karuizawa and the resort area is still viewed today as a mere imitation of the famous Karuizawa. This paper will examine the tourism designers who conceived the idea of building resorts in Kitakaruizawa, raised funds and started a new business to achieve their goals, and actually succeeded in the pre-World War II period.

The four developers discussed here are Ryuji Matsumoto and Yutaka Mizuno, both lawyers by profession, former journalist Eizaburo Konishi, and Hokkaido pioneer Hirochika Miyazaki. These men took on the new challenge of developing mountain resorts that no one had yet completed in Japan. Two of them retained their day jobs, while the other two de-

cided to leave their employment and make use of their work experience to attain a new goal. Matsumoto and Mizuno worked in close partnership, whereas the partner relationship between Konishi and Miyazaki was never as strong. The two teams competed with each other but worked hand in hand in advertising and promoting the little-known area.

In terms of skills and competence, the team of Konishi and Miyazaki surpassed its counterpart in know-how to entice private investors into the resort business. Yet, many resort development plans during the bubble economy in the Taisho Period imposed significant losses on small investors who simply did not understand the risks involved. Matsumoto and Mizuno first planned to operate a farm, but this venture ended in failure, causing damage to investors that included Oguri's investment bank. Even so, the two men exercised their ability as lawyers in purchasing massive resort sites and transferring the properties to the companies they had founded, and their business began to pick up. Their success can be attributed to the extraordinary combination of their skills and knowledge. Matsumoto's creativity to devise new models of the resort business and Mizuno's management skills to successfully implement Matsumoto's high-risk plans worked well together to make their business profitable. But outstanding creativity like that displayed by Matsumoto does not mitigate risk. Successful

tourism designers must exhibit not only creativity but also extensive legal knowledge and solid business management skills like Mizuno's.